

広報福島

発行 福島地区小学校長会
責任者 会長 小島 英二
編集 同 広 報 部

【巻頭言】

「校長のためのスーパー ビジョン（相談）を」

福島市立福島第四小学校長 渡邊 浩人

就労支援を展開する企業の中には、ヒューマンサービスの向上、社員の福利厚生を目的とする人事評価にかかわらない定期相談を導入する企業が増えてきていると聞く。カウンセラーとの相談を経て、随意相談に移行しながら問題解決（転職を含めて）に至るケースも多いとのこと。教員のための研修もちろん大切にしつつ、せっかくの研修が生かされ教員としてのキャリア形成につながり、自分の教員人生を生きがいを感じながら送れるようにしていく相談の機会の拡充は、学校においても大切な働き方改革といえないだろうか。

一方、怒りやイライラ・不安などネガティブな感情にさらされることが増えている教育現場。特に震災以降、そしてコロナ禍で、必ずしも円満解決に至らない正解のない判断を下したり、図らずも望まない対立構図に巻き込まれたりする中でストレスを感じてきた校長にこそ、評価面談ではないスーパーバイズやコンサルテーションまたは相談の機会が必要と感じている。校長は孤独だ。「困ったときは教育委員会に相談を…」と温かなメッセージを頂いてはいるが、指導や研修ではない、校長が自らの教育観を見つめ直し問題解決や自分なりの納得を見つけるためのスーパービジョンの機会があるとうれしい。わたしの場合それは、多様な視点を与えてくれた、様々な職種のメンバーからなる心理臨床の学習会であった。

さて、いよいよわたしの教師生活も残り5か月。思えば学校経営では風通しのよい職場どころか、このコロナ禍において授業研究の自主公開を企画するなど、どの学校でもブリザードを吹かせ続けてきたのではないかと猛省している。せめて退職後は、家族や自分を支え続けてくれた人々に感謝の思いを込めて「ハワイの風」を届けるように生きていきたいものである。

「私の校長修行」

—「発信」で自分をみがく—

福島市立清明小学校長 岩下 聡

私は怠惰な人間である。だから、“外圧”がないと、なかなか自ら進んでは学ばない。そんな私の“内圧”になっているのが、「発信」である。「発信するために考えること」が、かろうじて私の「学び」となっている。

私の「発信」の場は、「3つ」ある。「教職員へのメッセージ（不定期）」、「本校 web ページのブログ記事（最近ほぼ毎日）」、そして、「学校だより」である。

「学校だより」は、毎週金曜日に発行している。これは、校長になってからずっと続けていて、私の“習慣”となっている。たったA4判1枚の「学校だより」を出すだけなのだが、簡単なようで、これが意外とキツイ。特に最近、web ページのブログに“日々の出来事”を載せているので、「学校だより」は“校長の見ている景色”を伝えることを心がけている。水曜日になっても何も浮かばないと、ピンチである。「今週はもうダメか」と七転八倒しながら、何とか絞り出している。（もったくさん出している方がいるのにお恥ずかしい…）

さて、この「学校だより」には「校長のつぶやき」というコラム欄がある。例えば、子どもの姿から思ったことをつぶやいたり、ちゃっかりお願いごとをつぶやいたりしている。また、「私はワンマンである」とつぶやいて時には“炎上”することもある。ほんの数行のつぶやきなのだが、そのために日々“ネタを探す”ことも、私にとっての「学び」である。

たかが「学校だより」の発行ではあるが、私にとっては大切な「校長修行」の場である。先日の朝、学区内を歩いていると、「学校だよりを楽しみにしています」と保護者の方から声をかけられた。「校長修行」の場は、「保護者との信頼関係の構築」の場にもなっているようである。

個を活かすために…

川俣町立飯坂小学校長 丹伊田 伸哉

川俣町東部に位置する本校は全校生が29名。今年度からすべて複式の3学級となり、これまで複式学級における指導のあり方について研究を進めてきました。授業においては「ずらし・わたり」などの工夫をしながら指導します。また、学習リーダーや学習ガイドによる学び方を工夫するなどして、それぞれの学年や個々に向き合う時間を確保できるように努めています。

そのような授業を観察する時、教師による「直接指導時」以上に「間接指導時」において、児童の考える力が育つ場合が多いことに気づきます。

「教え込む」以上に「考えさせる」ことの方が大切であり、有用であるのだとも感じます。そして、他者と関わりながら、児童が自分自身と向き合い、考え、決定し、伝えることの大切さを認識することが、直接・間接・一斉・個別などいかなる指導においても必要なのだと思います。

GIGAスクール構想が動き出そうとしている今日。いわゆる「公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる」環境であっても、私たち教師は「個を活かすために何をすべきか」という視点を忘れてはなりません。同様に「全体（集団）」への視点をも正しく持つ必要があります。どんなにオンラインやリモートによる学習が進んでも、教科担任制が広がっても、学年の壁が低くなっても同じことなのではないでしょうか。

「個及び全体（集団）への効果的な指導のあり方」「主体性や自主性を育てる活動の推進」「共創、協働する活動の再認識」「豊かな人間性の醸成」「一人ひとりと向き合う時間の確保」「個を活かす指導を進める組織・体制づくり」などなど…。指導法から環境整備にいたる多様な課題について、これからも学校経営の視点から考え続けていきたいと思う今日です。

「知」の総合化

福島市立矢野目小学校長 古田 幸裕

6月下旬、学区内フィールドワークを実施した。名所・旧跡を知り、人の優しさに触れ、子どもたちは郷土のよさを再発見した。その表情や協働する姿から充実感に溢れていたことがうかがえる。このような取組が「知」の総合化の一端であり、人間性の育成にも関わるものであると考える。コロナ禍ではあったが、よい企画であった。

子どもたちにとっては、非日常的な場面が多い体験的な活動は、学校生活に潤いを与えるとともに、人間性や社会性を育む、豊かな学びの場でもある。また、日々の授業と体験的な活動は両輪であり、相互に作用し合いながら双方の効果を高めるものであると考える。

今年度、急遽教育課程の再編成を行った。学習内容の確認や日課表の改定、行事の検討等を行い、改めてスタートを切った形となった。臨時休業期間の遅れを取り戻し、年度内の完全履修を目指した。自分自身に焦りがあったことは否めない。

今般、デジタル化が促進され科学技術が加速度的に進展することにより、ますます便利な世の中になっていく。しかし一方、バーチャルな世界が占める割合が多くなり、直接体験の減少や人間関係の希薄化といった悩みも想定される。大切なものは何かを考えさせられる。

さて、教育課程再編成にあたっては、再々編成が必要であると感じた。日常とは違うフィールドがあってもよいのではないだろうか。方針は「体験的な活動を可能な範囲で取り入れる。」とした。全教職員が同じ思いであった。

現在、社会情勢は先行きが不透明で、閉塞感を感じることもある。だからこそ、各教科の学習と体験型学習の双方の重要性を見直し、子どもたちの意欲や達成感、そして笑顔を守らなければならないと感じている。

授業におけるICTの活用

福島市立御山小学校長 高橋 正浩

本校は、令和元年度から福島市教育委員会より研究委託を受け、『自分の考えを持ち、進んで表現できる児童の育成 ～ICT活用による、算数科の指導を通して～』をテーマにして研究に取り組んでまいりました。その中において、ICTの活用について、ICTを「使いこなす」幻想から、「授業の助っ人」への考えで、「どの段階」で、「どのような機器」を、「どのような目的」で、「どのような方法」で使用すると効果的に活用できるかを検証してまいりました。例えば、デジタル教科書の活用を、①見せるだけでよい、②書きこんだり、隠してみたり、動かしてみる、③自分なりの教科書をエディタ機能で作って見せるの3つのステップで考え使用してきました。本校で実践を進めていくことを通して、改めてICTありきの授業ではなく、ICTは授業を効果的に進めるための手段・道具であることが大切と思いました。

本市においても、令和3年度より全ての小中学校に児童生徒1人1台のタブレット端末(iPad)が導入されます。校内には、導入に積極的な先生、少し立ち止まってしまう先生などいることでしょう。私たち校長も、今後の授業のスタイルとしてICTの活用について考えていかなければならないと思います。Society5.0やGIGAスクール構想から、これからの学校において、教員の意識を改革し、子どもの学びを保証することは私たち校長の責務ではないでしょうか。

校長先生方、担任の先生方、まずは、タブレットの電源を入れてみましょう。プロジェクターの電源を入れてみましょう。デジタル教科書を起動してみましょう。出来るところからやっ

ていきませんか。

湯の町飯坂！魅力発見

福島市立飯坂小学校長 山岸 裕司

「寄らんしょ、来らんしょ、まわらんしょ、ササカ、サカ、サカ飯坂へ」この飯坂小唄は昭和6年に作られましたが、本校の歴史はさらに古く創立は明治6年です。温泉町の中心校ということもあり、昔から地域との結びつきは非常に強いものがありました。今でも、教育活動は多岐にわたって、学校・家庭・地域が一体となった地域全体の教育が推進されています。

今年度、5年生は総合的な学習の時間で「飯坂魅力発見」のテーマで、地域学習を進めています。10月には保護者、地域の施設・商店の協力のもと、「飯坂魅力発見フィールドワーク」を行いました。事前に子どもたちは、飯坂温泉観光協会の方から飯坂の温泉や名物等の話を聞き、班毎に計画を立てました。当日は、町内の食堂で飯坂ラーメン等の名物を食べ、旧堀切邸、鯖湖神社、片岡鶴太郎美術館の見学や鯖湖湯等の足湯めぐりを行い、そして老舗菓子店で名物お土産を買いました。町内の方々との触れ合いを深めながら、五感をフルに使って、飯坂の歴史や特色、地域のよさについて、実感をもって学ぶことができました。フィールドワークは2回行い、その学習の成果は学習発表会で劇を取り入れながら、工夫して発表する予定です。

2年生は「いいね、飯坂・湯の町で」のテーマのもと、保護者が経営している旅館を見学したり、老舗の菓子店の店主による和菓子作りの出前教室を開催したり、地域や保護者と連携しながら計画的に学習しています。また、昨年夏休み前には全校生が旅館の若旦那さんから、お盆に行われる「飯坂小唄流し踊り」の踊り方を教わりました。

これからも、学校・家庭・地域が一体となって、湯の町飯坂のよさや伝統にふれる学習を推進し、飯坂を愛する子どもを育てたいと考えています。

新たな「ふるさと学習」を

福島市立渡利小学校長 伏見 珠美

本校の学区には福島市が誇る観光資源「花見山」がたたずんでいる。

そのせいもあるのか、本校に赴任したとき地区の自然や環境を学習材に取り上げた「ふるさと学習」を大切にして教育課程が編成されていることを感じた。

本校合唱部が出演させていただいている3月末の花見山オープニングセレモニーや、4月上旬の福島駅東口での催し。昨年度は、福島民報社主催の「ふくしまジュニアチャレンジ(アイデア部門)」に4年生が応募し、その中の1グループが「アイデア部門 福島民報社賞」をいただいた。応募したアイデアが「花見山ガチャ」である。周囲の皆さんも「それは、おもしろい。」「実現できないか。」「来年度につなげられないか。」と目を輝かせ、子どもたち以上に盛り上がった。

そのような中での新型コロナウイルス感染症である。私達教職員も周囲の皆さんも、春から夏にかけては感染症拡大防止の対策に追われていた。最も美しい季節の花見山での活動も行うことができなかった。

本校も、2学期に入り「ふるさと学習」の活動再開。現在の状況に合わせて活動内容も変えながらの取組である。しかし、その中で昨年は気付かなかったことに目が向けられるようになった。「花見山って春だけなの。」「一年を通してかかわれば。」「お家の人に花見山を案内したい。」など、子どもたちの思いが広がりつつある。

そんな子どもたちの声を聞き、本校での「ふるさと学習」は何を目指しているのか、私自身も改めて考えているところである。「ピンチはチャンス」と言うが、今までの活動が立ち止まったおかげで、考える機会を与えてもらった。このチャンスを先生方と共に教育活動へ生かしていきたい。

学校閉校を地域とともに

福島市立青木小学校長 佐藤 厚生

青木小学校は令和3年3月31日をもって閉校となります。これまでの青木小学校の146年の歴史とその輝かしい伝統に思いを馳せたとき、この学校の存在の大きさに改めて感嘆するとともに、青木小学校の足跡をしっかりと残していくという思いを強くしたところです。

青木小学校は明治7年に開校し、昭和のピーク時には児童数が450名を超えることもありました。しかし、少子化という時代の波にはあがらうことはできず、現在は30名を切る状況となり、学校の小規模化に伴う教育上の諸課題がこれまで以上に顕在化しています。

学校の閉校統合により諸課題は解決するかもしれませんが、時代の趨勢とはいえ青木小学校が閉校となってしまうのは残念でなりません。もちろん、我々以上に地域の方にとっても簡単に片付けられる出来事ではありません。何故なら、地域の願いや愛情、そして浄財が代々青木小学校に脈々と受け継がれてきているからです。このようなことから、学校は、地域の思いをこの残り少ない日々の中でしっかり受け止め、閉校に向けた取組を地域と共に進めていかなければなりません。

地域のご理解ご協力により、7月に「閉校記念事業実行委員会」が設立され、青木地区全体での取組が始まりました。学校としても、青木小学校の今までの功績を後世に伝えていきたいという思いを伝え、今、地域と学校がこれまで経験したことがないほど一体となり閉校への準備が進められています。

青木小学校が閉校となっても記憶は永遠です。この閉校に向けた取組によって、青木小学校の関係者に、146年分の元気一杯な子どもたちの声、先生方の情熱、地域の方々の足跡が記憶として残ってくれればと思っています。

親の愛

福島市立佐倉小学校長 瀬川 和弘

無趣味な私が、唯一そうかなと思えるのは「散歩」です。時間があれば散歩をするようになってもう13年位になります。そのきっかけとなったのが忘れもしない岡山小教頭当時、泊付き人間ドックに行った際、初日の夜に血液検査の結果を知らされ、その数値の高さに驚いたことでした。知り合いの看護師に電話で聞いたら「脂分と血液に分離するくらいの血だ。」と言われてしまいました。命の危険を感じたので、早速健診が終わって帰る時、病院から駅までバスに乗らず歩きました。

それ以来、歩くことを趣味にしていますが、ここからタイトル「親の愛」の話に入ります。

ある時家の近くを散歩していると、翼をばたつかせよたよた歩くキジの雌を見かけました。「けがでもしたのかな」と思い近づきましたが逃げるそぶりが無く逆に威嚇するようにこちらへ向かってきます。周囲をよく見てみると、サクランボ用の棚に巡らせた網に雛が引っかかっていたのです。そうです、雛を守るために命がけで注意を自分へ向けようとしていたのです。

それからしばらくたった別の日、飯坂方面を歩いていると、草むらに狐がいました。こちらも珍しかったので、近づいて写真を撮りました。逃げるかなと思ったのですがその狐は微動だにせずこちらを見えています。おかしいなと思い、もう少し視野を広げてみたら10m位離れた所に子狐が2匹体を寄り添わせて小さくなっていました。

野生動物の母性本能の強さを感じました。さて、人間はどうでしょう。「虐待」が連日のように報道され、学校でも児童相談所へ通告する件数が増えてきています。「今の親はどうなっているんだ。」とその度に思いますが、「この親の小学校時代を担任したのが我々の年代なんだよな。」と、退職を間近に控え、今更ながらに反省しています。

3冊の本との出会いから

福島市立杉妻小学校長 鳴原 浩之

「慌てない、慌てない ひと休み、ひと休み」。昭和40年代を生きてきた方には、聞き覚えのあるフレーズではないでしょうか。テレビアニメ「一休さん」でCMに入る前に流れてきた言葉です。

教職員の多忙化解消が課題となっている昨今、一休みは大切なキーワードのひとつでしょう。

「人生には休みが必要だ。立ち止まってじっくり周りを眺めると、小さなことにこだわっていた自分を客観視することができる。すると、あなたらしい生き方につながる道が見えてくるはずだ。」（「小休止のすすめ 運を呼び込む『人生の休み方』の極意」ヒロミ・藤田晋共著より引用）

「誰が見ても『ベスト』と思われる選択肢がどこかにあるわけではなく、他と比べて自分より合う『ベター』なものを選び続けていくうちに『これでいいのだ』という納得感が生まれてくるものだと思う。」（「諦める力勝てないのは努力が足りないからじゃない」為末大著より引用）

日々追われる日常のなか、仕事の真の意味や、自分の人生の意味など見失いかけているのかもかもしれません。コロナ禍により臨時休業となった2ヶ月弱、対応に追われはしましたが、どの学校でも「新しい学校の姿」を情報の少ない中で思い描いてきました。この小休止が良い意味で次に繋がってほしいと願いつつ、自戒とともにまた一歩。

「学校」にとって本物の原点とは何か、子どもの育ちを真ん中に、全職員で語り合わなければならないと痛感、今日も大先輩の言葉が聞こえてくるようです。「原点に返れと言うけれど・・・、原点がお題目になっていませんか。」と。

「己の弱さや不甲斐なさにどれだけ打ちのめされようと心を燃やせ歯を喰いしばって前を向け」（『鬼滅の刃』の折れない心をつくる言葉 藤寺郁光著より引用）一歩一歩前へ、牛歩の如く。

児童に寄り添う生徒指導

～ 県生徒指導部のアンケート調査結果から～

福島地区生徒指導部長

福島市立南向台小学校長 齋藤 秀樹

福島地区生徒指導部では、県小学校長会生徒指導部と関係を図りながら、本地区の生徒指導上の諸課題に対応をしてきました。以下、報告します。

本地区で今年度4月から3か月の間に、震災の影響によって「心に何らかの傷を受けたことが要因と思われる反応」を示した児童は、昨年度の21名から3名に減少しました。SCやSSWとの連携が、効果的な取組だったと言えます。

本地区の不登校及び不登校傾向の児童数は、年々増加傾向にあります。今年度当初3か月間の不登校児童数は昨年度の約1.5倍になっています。臨時休業による影響も考えられ、SCや関係機関との連携による一人一人に寄り添った支援を行っていくことが重要です。

昨年度のいじめの認知件数は、前年よりやや増加しましたが、重大事態の報告件数は減少しました。今年度、新型コロナウイルス感染症を要因とするいじめも懸念され、「いじめ見逃しゼロ」を合い言葉に、今後もアンケート調査等による状況把握や迅速かつ丁寧な組織的対応が重要です。

虐待は、関係機関への通告・相談が57件と前年比1.5倍に増加しました。虐待の内容では、身体的虐待が1.6倍に増えています。SOSのサインを見逃さずに対応できる組織体制の整備と保護者・地域への啓発活動の継続が重要です。

昨年度、暴力行為の件数は減少しましたが、重大事態の件数は増加しました。SSW等と連携しながら、個に応じた対応を進めることが重要です。

SNS・ネット利用に関しては、69%の児童が自分用の機器を所持しています。利用時間については、年々長時間化する傾向が顕著で、ネット依存と思われる状態になっている児童も増加しています。改めて児童・保護者への情報モラル教育を進めていくことが望まれます。

地区として、今後も児童に寄り添いながら、各校が抱える生徒指導上の諸課題に取り組みます。

研究推進の充実に向けて

福島地区研究部長

福島市立大森小学校長 佐藤 浩昭

令和2年度より、新研究が始まりました。研究主題「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」副主題「たくましく生き ともによりよい未来を創っていく子どもを育てる学校経営と校長の在り方」として取り組んでいきます。

8月20日(木)には、福島県小学校長会福島支会研究協議会を開催し、各方部の研究内容を発表していただきました。

- <発表方部> ※敬称略
- 第4分科会「豊かな人間性」 視点1 東方部
平久井 淳(余目小)
 - 第5分科会「健やかな体」 視点1 西方部
菅野 智(平石小)
 - 第10分科会「社会との連携・協働」 視点1 南方部
宍戸 与一(金谷川小)

- <希望方部>
- 第1分科会「経営、組織・運営」 視点1 北方部
井上 明浩(水保小)
 - 第9分科会「自立と社会性」 視点2 畿・畿地方
白土 勲(中野小)
 - 第3分科会「知性・創造性」 視点2 川俣方部
紙面発表 丹伊田 伸哉(川俣・飯坂小)
- 県小学校長会研究部長の渡邊浩人先生よりご指導いただきました。

今後、各方部・各校におきまして、さらなる研究を推進し、校長の果たすべき役割と指導性を究明し、互いに成果の共有を図り、学校経営の力量を高めていきたいと思います。

また、令和3年度第61回東北連合小学校長会研究協議会福島大会へ向けての分科会運営計画の立案も進んでいます。充実した分科会となるように、福島地区会員の皆様のご協力をよろしくお願いたします。

編集後記

学校の「新しい日常」の中で、校長の日常も変化し、新しい対応も求められています。お寄せいただいた玉稿から先生方の日々の思いや取組を知ることができました。ありがとうございました。

福島市立水原小学校長 唯木 常晴